

神話的世界観とは

アレクサンドロス大王が愛したホメロスの『イリアス』に描かれる世界観が神話的世界観に他ならない。人間たちの戦争は神々の行いに由来し、その勝敗も神々に左右される。世界の出来事や人間の運命（モイラ）も神々のわざによるものだという世界観である。アレクサンドロス大王もエジプトの神殿で自らが神の血を引く半神（ヘロス＝ヒーロー（英雄））であるという神託を受け、世界支配を目指したという。

ホメロスの世界とアレクサンドロス——トロイアの祈り

野町啓（2000）『謎の古代都市 アレクサンドリア』講談社現代新書より

先のプルタルコスによると、アレクサンドロスは、単に酒好きの英雄というにとどまらず、大変な読書家であり、とりわけホメロスの『イリアス』を愛好し、学問上の師アリストテレスによる校訂本を、宿敵ダレイオスが所持していたという豪華な小箱（「ナルテコスの小筐」と呼ばれる茴香の一種から作られた貴重品保存用の小箱）に入れ、枕頭の本としていたという。では、なぜ彼がホメロス、ことに『イリアス』を愛読したのであろうか。これに答えるためにも、また『イリアス』と彼、ひいてはアレクサンドリアとの関わりを述べるためにも、まず物語の背景となっている「トロイア戦争」についてふれておかなければならない。

トロイア戦争は、簡単に言ってしまうと、ギリシアきっての美女、ペロポネソス半島南部のラケダイモン（スパルタ）の王メネラオスの妃ヘレネが、エーゲ海をはさんで対岸にある小アジアのトロイア（別名イリオン。なお『イリアス』とは「イリオンにまつわる物語」を意味する）の王子パリスに連れ去られたことに端を発する。しかもこのパリスは、アレクサンドロスとも呼ばれ、当面の主題となっているアレクサンドロスと同名なのである。古代にあっては、同名の人物が多数存在することは別に珍しい現象ではない。例えば、紀元後三世紀頃ディオゲネス・ラエルティオスにより著された『ギリシア哲学者の生涯と教説』という、タレスから始まってエピクロスに至る著名な思想家ごとに一章ずつをあてた書物がある。この本では、各章の末尾を「ところでプラトンという名の人間はほかにもこれこれしかじかの人々がいた」という記述で締めている。したがって同名の場合、父親の名や出身地、属する学派を名前につけて区別することになる。アレクサンドロス自身についても、「大王」（メガス）という称号をつけたり、「三世」を付すことが示すように、彼の家系にはアレクサンドロス一世、二世という同名の王がすでにいた。だがパリスとアレクサンドロス大王とは、単に名前にとどまらず、アレクサンドリアの建設に関し伝説上とはいえ、浅からぬ因縁で結ばれてくるのである。

トロイア戦争のそもそもの発端は、オリンポスの最高神ゼウスの意志へと遡る。ある時大地を宰領する女神ガイアが、人間たちに敬神の念が薄らぎ、しかも人口が増えてその重さに耐えられなくなったとゼウスに訴えた。いつの場合でも、人間の数を減少させる最も有効な手段は戦争である。ゼウスの場合も例外ではなく、ひとつ戦争を引き起こそうと考え、次のように事を運んだのである。海神ポセイドンと人間ペレウスの結婚式——ちなみにこの両者の子がアキレウスであり、彼は神と人間の子、つまり半神＝ヘロス（英雄）ということになる——の宴席に諸神は招かれたのに、わざと不和・争いを宰領する女神エリスだけは除かれるように謀った。それを恨んだエリスは、「いちばん美しい女神に」と書かれた黄金の林檎を宴席に投げ入れたため、ゼウスの妻ヘラとアテナ、アフロディテの三女神の間で、誰が最も美しいかをめぐって争いが生じ、ゼウスの命令でパリスの審判を仰ぐことになる。パリスはトロイアの王プリアモスとその妃ヘカベの末子であったが、誕生の時、生かしておくとう王家に禍いをもたらすという予言があり、トルコ西部古代フリュギアのイデ山（ガズ山）の麓に捨てられていたのである。そこでパリスに対し、三女神は、それぞれ、自分をいちばん美しいと判定してくれるなら、ヘラは世界の支配権、アテナは戦争における常勝、アフロディテは美女をあたえることを約束するが、結局パリスはアフロディテに裁定を下すのである。そしていわばその見返りとして、先にふれたラケダイモンの王メネラオスの妃ヘレネを奪い、故国へと帰還するのである。このヘレネを取り戻すため、メネラオスの兄、当時ペロポネオス半島北部アルゴス地方（ミュケナイ）を支配していたアガメムノンを総大将として、ギリシア軍が小アジアの北西部、現在のトルコ領にあるトロイアへと進攻するのがいわゆるトロイア戦争であり、ホメロスの大叙事詩『イリアス』の背景にほかならない。

ここであえて「背景」と言ったのは、現在われわれが手にしている『イリアス』全二四巻、一万五六九三行には、戦争の発端についての明確な叙述はない。その最終巻にほんの数行「パリスの審判」についてふれられているにすぎないからである。そこに展開されているのは、トロイア戦争一〇年目の数十日間、ギリシア方随一の英雄アキレウスと総大将アガメムノンとの戦利品として捕らえられた女性をめぐる確執、親友パトロクロスがトロイア方の総大将、パリスの長兄ヘクトルに討たれたことへのアキレウスの怒りと復讐の物語なのである。トロイア戦争をめぐるのは、現存の書物の形で残されている『イリアス』の他にも、いくつかの物語が「ホメリダイ」（ホメロスの後裔）と称する吟遊詩人たちにより口誦され、口承されてきた。そのほとんどは散逸してしまったが、戦争のこうした発端をテーマとしたものに叙事詩『キュプリア』のあったことが、ヘロドトスにより伝えられている。この叙事詩『キュプリア』自体も伝存しないが、ネオプラトニズムの主要な思想家の一人、紀元後五世紀のプロクロスのある著書にその梗概が記されたことから、われわれは上述のような経緯を知ることができる。しかもこの場合、より正確に言う、プロクロスのこの本自体も現存してはいない。だが、アレクサンドリアの文献学研究の精神を継承する、コンスタンティノーブルの学者かつ大司教、九世紀のフォティオスの、先のディオドロスと同名の図書館を意味する『ビブリオテーケー』の一節に、プロクロスの著書の内容が伝存されており、こうした二重の経路を辿って、トロイア戦争の発端について、どのような物語がなされたかをわれわれは知ることができたのである。

エティエンヌ・ジョラ 《パトロクロスの死の復讐に出かけるアキレウス》



古代ギリシアと神話 そして哲学の誕生

オデュッセイア Odysseia

『日本大百科全書』（小学館）松平千秋

『イリアス』とともにホメロスの作とされる古代ギリシアの英雄叙事詩。今日では『イリアス』より約一世代遅れて紀元前 8 世紀末に制作されたもので、その作者も『イリアス』の作者と同一人ではないと考える学者が多い。『イリアス』より約 3000 行短く、1 万 2000 行にわずかに足りない。『イリアス』同様 24 巻に分かれ、ギリシア語アルファベット 24 字で順序を示す。題名は「オデュッセウスの歌」の意で、トロヤ落城後、さらに 10 年にわたって各地を放浪した英雄オデュッセウスを主人公とした冒険談である。

物語は放浪生活も終わりに近く、オデュッセウスはニンフのカリプソに愛され、オギュギエの島に留められてすでに 7 年になる時点から始まる。一方オデュッセウスの故国イタケでは、彼はすでに死亡したものとして、近隣の貴族の若者たち多数が妃(きさき)ペネロペイアに求婚し、屋敷に居座っては宴遊に明け暮れ、妃とひとり息子のテレマコスを悩ませている。やがてオデュッセウスは故国へ帰り、テレマコスと力をあわせて悪虐な求婚者たちをことごとく討ち果たすまでの、約 40 日間のできごとが詩の内容である。

冒頭、神々の会議が開かれ、アテネの発議でオデュッセウスを帰国させることが決定される。巻 1~4 では、アテネに激励されたテレマコスが、求婚者たちに対抗する決意を固めるとともに、父の消息を求めて、ピロスのネストル、スパルタのメネラオスを訪ねる。

巻五から話はオデュッセウスに移り、神ヘルメスがカリプソにゼウスの意を伝え、オデュッセウスは筏(いかだ)に乗って帰国しようとするが、ポセイドンの起こした嵐(あらし)で難破し、からくもスケリエ島に漂着、ここの住民パイエクス人の保護を受ける。巻 6~12 は、パイエクス人の王アルキノオスの館(やかた)で、オデュッセウスが物語る数々の冒険談がその大部分を占める。

物語のほとんどすべては、隻眼(せきがん)の巨人キクロペスや歌う魔女セイレンなどの怪異談である。巻 13 でイタケに帰還したオデュッセウスは、テレマコスと忠義な豚飼(とく)イウマイオスの協力を得て、悪人たちを討ち、妻ペネロペイア、老父ラエルテスと再会、求婚者たちの遺族との対決も、アテネの介入によって回避され、万事めでたく終わる。全編中カリプソの島の美しい自然描写(巻 5)、パイエクス人の王女ナウシカアのかれんな姿(巻 6)、キクロペスの物語(巻 9)、乳母(うば)に足を洗わすとき古傷を見られて素姓を悟られる場面(巻 19)、かたくなに認知を拒むペネロペイアが、ついにオデュッセウスを夫と認めるくだり(巻 23)などは、とくに印象深い名場面である。

イリアスとオデュッセイア

村田数之亮他『世界の歴史 4 ギリシア』(河出書房新社, 1989)

怒り嫉妬し策略する。“神”

ホメロスのふたつの詩に描かれた事件は、すべて神が背後にあって糸をひき、その意向によって進行する。戦いの勝敗も英雄の死や負傷も、また航海の成否も最後には神の予定や裁決によって定められる。

人間である英雄は、神意を十分に知ることはできない。しかしかれらは厭世的になることなく、自分の能力のかぎりをつくして、倒れ、あるいは敗れる。かれらの努力は、自己に課せられた義務をあくまでつくすことにむけられる。それは、自主的に決意し、自己に忠実になろうとする努力だ。それはまた、神意にかかわりなく、人間としての存在の主張である。

カオス（混沌）から生まれるコスモス（秩序）——ヘシオドス『神統記』

ヘシオドス，廣川洋一訳『神統記』（岩波文庫，1984）

原初の生成

まず原初にカオスが生じた さてつぎに

胸幅広い大地（ガイア） 雪を戴くオリュンポスの頂に

宮居する八百万（やおよろず）の神々の常久（とこしえ）に揺るぎない御座（みくら）なる大地 と

路広（みちびろ）の大地の奥底にある曖々（あいあい）たるタルタロス

さらに不死の神々のうちでも並びなく美しいエロスが生じたもうた。

この神は四肢の力を萎えさせ 神々と人間ども よろずの者の胸うちの思慮と考え深い心をうち拉（ひし）ぐ。

カオスの子

カオスから 幽冥（エレボス）と暗い夜（ニュクス）が生じた

次によるから 澄明（アイテル）と昼日（ヘメレ）が生じた

夜が幽冥と情愛の契りして身重となり 生みたもうたのである。

パンドラの箱 ※——ヘシオドス『仕事と日』

ヘシオドス：逸身喜一郎『岩波哲学思想辞典』（岩波書店）

プロメテウスの神話は『神統記』ならびに『仕事と日』にあつては、ゼウスにより人間に罰として与えられた最初の女性パンドラがさまざまな災いを閉じ込めてあった大甕を開いた結果、人類には労苦が満ちるようになったとする、労働の起源とも言える神話も語られる。しかし〈希望〉はなおも残ったとこの物語が示すように、ヘシオドスは労働に信を置く。勤勉に働くことこそ餓えを退け、富へと導くのである。

『仕事と日』の中ではまた、検量を握った者が力に任せて好き勝手に振舞ってはならないこと、すなわち正義が労働と並んで力説されている。その他きわめて具体的な生活の知恵や人生訓も、数多く語られている。

※パンドラの箱：ゼウスがパンドラに持たせた、あらゆる災いの詰まった箱（本来は壺）。彼女が地上に着いたとき好奇心から開けたところ、すべての災いが地上に飛び出したが、急いでふたをしたので希望だけが残ったという。

「驚異」から始まる哲学 —— アリストテレス『形而上学』

アリストテレス，出隆 訳『形而上学』（岩波文庫，1959）

諸学のうちで最も王者的であり、いずれの隷属的な学よりもいっそう著しく王者的であるのは、おのおのの物事が何のために（何を目的として）なさるべきかを知っているところの学である。そしてこの目的は、そのおのおのにおいてはそれぞれの善であり、全般的には自然全体における最高善である。さて、上述のすべてからして我々の求めているもの（知恵）の名前は、まさにこの同じ学に与えられる。すなわちそれは、**第一の原理や原因を研究する理論（観想）的な学**であらねばならない、というのは、善と目的というのも原因の一種だからである。

ところで、この知恵は制作的ではない。このことは、かつて最初に知恵を愛求した人々のことからみても明らかである。けだし、**驚異することによって人間は、今日でもそうであるがあの最初の場合にもあのように知恵を愛求し（哲学し）始めたのである。**ただしそのはじめには、ごく身近の不思議な事柄に驚異の念を抱き、それからだいに少しずつ進んで遙かに大きな事象についても疑念を抱くようになったのである。たとえば、月の受ける諸相だの太陽や星の諸態だのについて、あるいはまた全宇宙の生成について。ところで、このように疑念を抱き脅威を感じるものは自分を無知なものだと考える。それゆえに、神話の愛好家もまた或る意味では知恵の愛求者（哲学者）である。というのは神話が驚異さるべき不思議なことどもからなっているからである。

語源——ギリシア語起源の言葉

そもそも, "It was Greek to me." (「わたしにはちんぷんかんぷんだった」) という台詞がシェークスピアの『ジュリアス・シーザー』の中で使われているように, イギリス人たちにとってもギリシア語は難解な言語だったのである。しかし, 英語の中にもギリシア語起源の単語はたくさんある。そして, それはカタカナ日本語の中にもたくさん入り込んでいる。

ギリシア文字

| 大文字 | 小文字 | 名称 | 音価 |
|-----|-----|---------|--------|
| A | α | alpha | a |
| B | β | beta | b |
| Γ | γ | gamma | g |
| Δ | δ | delta | d |
| E | ε | epsilon | e |
| Z | ζ | zeta | z |
| H | η | eta | ē |
| Θ | θ | theta | th |
| I | ι | iota | i |
| K | κ | kappa | k(c) |
| Λ | λ | lambda | l |
| M | μ | mu | m |
| N | ν | nu | n |
| Ξ | ξ | xi | x |
| O | ο | omicron | o |
| Π | π | pi | p |
| P | ρ | rho | r(rh) |
| Σ | σ | sigma | s |
| T | τ | tau | t |
| Υ | υ | upsilon | y |
| Φ | φ | phi | ph |
| X | χ | khi | kh(ch) |
| Ψ | ψ | psi | ps |
| Ω | ω | omega | ō |

ギリシア語語源の言葉

Φ Ι Ρ Ο Σ Ο Φ Ι Α (philosophia) **phileo** = 愛する + **sophia** = 知恵
⇒ 知恵を愛すること ⇒ philosophy(英語) = 哲学・フィロソフィー

Φ ι λ ό π ο ν ο ς (philoponos) = 労働を愛する

⇒ ヒロポン (Philopon) とはメタンフェタミンの商品名であり, 覚醒剤と同成分の薬品の名。「疲労をポンと取る」にも掛けている。

フィルハーモニー (philharmonic)

= φ ι λ ο ς (愛好する) + α ρ μ ο ν ι α (調和)

Sophia University = () 大学

聖母連祷: 聖母マリアに神へのとりなしを願う祈り

Sedes sapientiae (羅甸語) = Seat of wisdom = 上智の座

Θ Ε Ω Ρ Ι Α (thoria) テオリア (観想, 観照, 理論) ← θ ε ω ρ ε ι ν (theorein) 見る

⇒theory () ⇔ () 実践 ←πρασσειν (prassein) 達成する

メソポタミア (Μεσοποταμία) ←μεσος (真ん中の) + ποταμος (河)

cf. hippopotamus () ←ιππος (馬) + ποταμος (河)

cf. フィリピン (Philippine) ←フェリペ二世 (Philip) ←Φιλιππος ()

写真 (photograph) ←ΠΩΤΟΣ (pōtos) 光 + ΓΡΑΦΩ (graphō) 書く

ΛΟΓΟΣ (logos) ロゴス (言葉, 論理, 理性, 理法, キリスト) ←λεγειν (話す)

⇒logic () -logy (〜学)

-logy の英単語を調べよう

astrology : () ←αστρον (星)

anthropology : () ←ανθρωπος (人間)

⇒フィランソロピー: 企業の社会貢献活動 =phileo (愛する) +anthropos (人間)

cosmology : () ←κοσμος (宇宙, 秩序)

ecology : 環境学 ←οικος (家)

cf. economy : () = ←οικος (家) +νομια (管理)

epistemology : () ←επιστημη (知識, エピステーメー)

ethnology : (,) ←εθνος (部族)

ideology : (,) ←ιδεα (容姿, イデア)

technology : () ←τεχνη (技術)

zoology : () ←ζωον (動物)

cf. ζωον πολιτικον (zōon politicon 社会的動物)

psychology : () ←ψυχη (魂)

biology : () ←βιος (生, 生命, 生活)

cf. cynic (キニク派, 犬儒派, 皮肉屋) ←κυνικος βιος (犬のような生活)

参考図書 風間喜代三『ラテン語とギリシア語』(三省堂, 1998)

自然哲学者たち

タレス Thales (前624ころ—前546ころ)

彼は天文学を研究した最初の人であり、また日蝕や太陽の回帰を予言した最初の人であったように思われる。クセノパネスやヘロドトスが彼を賞賛しているのはそのためであり、ヘラクレイトスとデモクリトスもそのことを証言している。

万物の原理を彼は水であるとした。そして世界は生命を有しており、神々に満ちているとした。一年の四季を発見したのは彼であり、また一年を365日に分けたのも彼であるといわれている。師といえるような人は彼にはなかったが、ただエジプトへ行って、その地の神官と共に過ごしたことだけは別である。彼は影が我々と同じ長さになるときを見計らって、ピラミッドをその影から計測したとヒエロニュモスは伝えている。

ディオゲネス・ラエルティオス「ギリシア哲学者列伝」

ところで、最初に哲学した人たちの大部分は質料の意味におけるそのみを万物の原理であると考えた。なぜなら、存在するものすべてがそれから存在しているもの、第一のものであるそれから生成し、最後にはそれへと消滅して行くもの（ただし実体はそのままでありつづけ、様態の点でのみ転化する）そう言ったものを彼らは諸存在の元素であり、原理であるというからである。……タレスは、こういった哲学の開祖であるが、水がそれであるという。（それゆえ大地は水の上に浮かんでいるとかれは主張した。）彼がこのような見解を抱くにいたったのはおそらく、すべてのものの養分が湿っていること、また熱そのものも湿ったものから生じ、それによって維持されていることを見たことからであろう。だが、それから生じるところのそのものとは万物の原理である。実際こういったことによって彼はそのような見解を抱くにいたったのであろうが、またすべての種子が湿った本性を有していることによってでもあろう。水こそは湿った本性の原理なのである。

アリストテレス「形而上学」

アナクシマンドロス Anaximandros (前610ころ—前547ころ)

古代ギリシアの哲学者。小アジアのイオニア地方の町ミレトスに生まれる。タレスの後継者とされ、『ペリ・フェセオース』（自然について）という著作があったと伝えられるが、残っているのはわずかな断片だけである。万物のもとのもの（アルケー）は無限定なもの（ト・アペイロン）であり、この神的で不滅なアペイロンから、まず暖かいものと冷たいもの、乾いたものと湿ったもの、といった性質の対立するものが分かれ、そして、争い合うこの対立するものから地水火風が生じ、さらに星辰(せいしん)や生物が生じるが、これらは掟(おきて)に従い、やがて争いの罪をあがなって死滅し、アペイロンへ戻るというのが、その教えである。また、大地は円筒状であって世界の中央に位置しているとか、人間は初めは魚に似ていたとか説くとともに、日時計を発明したりしたとも伝えられる。

「日本大百科全書」小学館

アナクシメネス Anaximenes (前585ころ—前528ころ)

古代ギリシアの哲学者。小アジアのイオニア地方の町ミレトスに生まれる。アナクシマンドロスの後継者とされるが、著作は失われ、わずかな断片を残すのみである。万物のもとのもの（アルケー）は神的な空気であり、この空気が希薄になると暖かい火が生じ、濃厚になると冷たい水や土や石などが生じるが、この希薄化と濃厚化を通じて生じたあらゆるものは、ふたたび空気へ返るとというのが、その教えの根本である。この空気はまた生命の原理でもあり、したがって人間の魂も空気であって、「空気であるわれわれの魂がわれわれを統率しているように、氣息(プネウマ)すなわち空気が世界全体を取り巻いている」と説くとともに、大地は平板状であって空気の上に乗っているとか、天体は大地から立ち上る蒸気が希薄となり火となってできあがったものであるとか説いたと伝えられる。

「日本大百科全書」小学館

パルメニデス Parmenides (前 515 ころ—前 445 ころ)

古代ギリシアの哲学者。南イタリアの町エレアに生まれる。エレア学派の始祖。富裕な名門の出身で、町の指導者の1人であったらしく、エレア市民のために法律を設定したとも伝えられる。叙事詩の韻律である六脚韻を駆使して『ペリ・フェセオース』(自然について)を書きつづったが、いまは断片が残されているのみである。この著作は、序詩、第一部、第二部といった三部からなっている。序詩は、若いパルメニデスが日の神の娘たちの駆る馬車に乗り、暗い臆見(おくけん)の世界を去って明るい真理の世界へたどり着き、女神から真理と臆見について啓示を受ける、といった寓話(ぐうわ)的な舞台を設定する。第一部は、啓示された真理を歌い、「在るもの」(ト・エオン)があり「在らぬもの」(ト・メー・エオン)はないという前提から、不生不滅、不可分、不変不動であって、完結した丸い球に似ている、といった「在るもの」の属性を引き出し、「在るもの」をわれわれに示す理性のみが真理をとらえ、「多」や生成や消滅や変化を信じさせる感覚は誤謬(ごびゆう)の源であると説く。第二部は、誤謬に満ちた臆見を歌い、感覚の世界は「在るもの」(光)と「在らぬもの」(闇(やみ))という二つの「形体」(デマス)を併置し、両者からあらゆるものを合成するところに生じると説く。こうした思索が当時の思想界に与えた影響は計り知れない。

「日本大百科全書」小学館

ゼノン (エレアの) Zenon ho Eleates (前 490/485 ころ—前 430 ころ)

古代ギリシアのエレア学派の哲学者。最初ピタゴラス学派に属したとも、政治活動に従事したとも伝えられる。エレア学派の祖パルメニデスの弟子にして親しい友人であった。パルメニデスを弁護する作品を書いたが、プラトンはその『パルメニデス』のなかで、それが若気の至りであったとゼノンに告白させている。また『パイドロス』のなかで、ゼノンについて、同じものが似ており似ていない、一であり多である、静止しており運動している、と聞く者に思わせる技術の持ち主と紹介している。そこからアリストテレスは、ゼノンを、前提から矛盾した結論を引き出す弁証論の発見者とよんだと伝えられている。不変不動の一つなる「有るもの」を思索した師パルメニデスを弁護するために、弁証論を駆使した「ゼノンの逆説」を提出した。多くのものが存在することを否定する論とアリストテレスが報告している運動否定論(「多否定論」「二分法」「アキレスと亀(かめ)」「飛矢」「競技場」)である。その精緻(せいち)な論理によって無限、連続、空間、時間、一多の問題を再検討するよう強い影響は大きかった。現代でもベルクソンをはじめ多くの人々がその「逆説」を分析解釈する努力を傾けている。しかしゼノンでは、論理は独走し、哲学は師の思索を弁護することにすり替わっていた。「日本大百科全書」小学館

ヘラクレイトス Herakleitos (前 540 ころ—?)

ギリシアの哲学者。生没年不詳だが、前500年ころがその活動の盛期とされる。エフェソスの王家の出身。火を万物のものとものとし、その万物は変化してやまぬと説いた哲学者とされてきたが、いわゆる〈すべては流れる(パンタ・レイ pantarhei)〉という有名な言葉もプラトンやアリストテレスの批判的解釈を継承したシンプリキオスの言葉であって、彼自身の直接の発言ではない。火や流動についてもたしかに述べてはいるが、それは彼の哲学の一面であって、もっとも重要なのは〈ロゴス〉についての考えである。〈事実、すべてはこのロゴスにしたがって生ずるにもかかわらず、人々はなお、そを経験せざる者のごとし〉(断片1)。〈われに聴かずにロゴスに聴きて、ロゴスに従いつつ、すべては一なりと述べるこそ賢かりけれ〉(断片50)。

例えば彼は、弓や琴のような日常的な小道具を手がかりにしてそのロゴス支配の事態を説明しようとする。弓の弦や琴の弦は二つの逆方向に働く力の結合によって成立するが、このような対立的なものの統一的結合という理法こそが彼の強調するロゴスである。その対立的な面に注目して、彼はまたロゴスを比喩的に〈戦い〉と呼ぶ。〈戦いは万物の父、万物の王なり〉(断片53)。こうしたロゴスの支配は人事の場面のみならず、ひろく全宇宙に及んでいる。昼と夜とは明暗の形で対立し、人々はその区別にこだわるが、実は昼は夜に、夜は昼になるのであって、その過程を通じて両者は結合して一体をなしているのである。また、火と水、水と土とはそれぞれ対立して異なるが、実は火は水に、水は火に転化し、水は土に、土は水に転化する。この宇宙論的転化の過程に注目すれば、やはり火も水も土も〈一なり〉という道理が理解されるはずなのである。だが彼のいうその道理、すなわちロゴスは人々に理解されなかった。そこに彼のいらだちと孤独があった。〈大多数の輩(やから)はさながら家畜のごとく飽食するなり〉(断片29)。

百科事典に見るソフィストとソクラテス

ソフィスト sophistes ギリシア語 sophist 英語

紀元前5世紀なかばごろから前4世紀にかけてギリシアで活躍した知識人たちの呼び名。

多くは地方ポリス（都市国家）の出身者で、アテネほかのポリスを巡り、弁論術を中心にさまざまな専門的知識を教授することを職業とした。アブデラのプロタゴラス、レオンティノイのゴルギアス、ケオスのプロディコス、エリスのヒッピアスらが有名である。

民主政のアテネでは、議会や法廷での弁論に優れていることが、政界での、つまり市民としての成功を意味した。ソフィストたちは時代の要求にこたえ、多額の謝礼と引き換えに富家の子弟に演説や論争の技術を授けた。

講義は作文修辞の法のみならず、法律道徳論、文明論などの実質的思想にも及んだ。彼らが徹底的な形で示した言論の魅力は知的な青年たちをとりこにしたが、やがて保守的市民から過激な危険思想家と目されるようになる。ソクラテスの受難も、ソフィストと混同されて市民の反感を買ったことが一因であった。

ソフィストの思想のうち、プロタゴラスの「人間尺度命題」は人間中心主義、主観主義、相対主義の表明とみられ、ゴルギアスの「非存在の論」は知識否定論として、またトラシュマコスの「正義とは強者の利益なり」という説や、アンティフォン、ヒッピアスらの法（ノモス）と自然（ピュシス）の分離論は法や道徳に対する挑戦とみなすことができる。しかし他面では、ゴルギアスの修辞学やプロディコスの類義語用法のように、それ自体としては単に言論の手段を提供するにすぎなかったものが、アテネ市民の野心や欲望と結び付いて、このような思想になったともいえよう。

哲学者プラトンはソフィストたちの名を冠した一連の作品を著し、ソクラテスと真理のために、これらの思想と対決しその虚偽を暴いた。個人と国家のために善を図り言論と行為にもっとも有能有力な者となる道を教授するというのがソフィストたちの自称であったが、彼らが実際に教えたものは、善について無知でありながら優れた人間であると思わせる方法であり、事の真偽や正邪を問わず、ただ大衆を扇動して論敵に勝つための技術であった。

ソフィストの語はこうして、詭弁（きべん）の徒を意味することとなり詭弁学派ともいわれた。ただし、事態の裏面をみるならば、ソクラテスとプラトンの哲学はソフィストたちの恐るべき論理から生まれたとも考えられ、その意味で彼らの哲学史上の意義がしばしば再評価される。（田中享英）小学館

ソクラテス 前 470 か 469-前 399

古代ギリシアの哲学者。アテナイのアロペケ区に生まれた。父ソフロニスコスは石彫家だったと伝えられるが、確証はない。母ファイナレテは助産術を心得ていた。クサンティッペと結婚したのはかなり晩年のことで、ソクラテスが死んだとき、3人の子どもはまだ年少であった。有名な悪妻伝説は、おおむね後代の誇張された作り話である。ペロポネソス戦争期に、重装歩兵として北ギリシアに2回、ボイオティアに1回従軍し、賞賛すべき忍耐力と沈着の勇を人々に印象づけた。また、このとき以外にはアテナイの町を離れることがなかったという。若いころには自然研究にもたずさわったが、後年は人間の問題のみに関心を向け、アテナイの街頭や体育場などで対話・問答を行いながら過ごした。彼の魅力的な人格とユーモアに満ちた鋭い論法に共感する若者たちが〈ソクラテスの仲間〉を形成し、プラトンもそのサークルにあって大きな影響を受けた。彼はまた一面において、年少のころから〈ダイモンの（禁止の）声〉を聞き、しばしば深い忘我状態を経験する〈憑（つ）かれた人〉でもあった。ペロポネソス戦争終結から5年後の前399年、不敬神のとがで告発を受け、裁判の結果死刑に処されて生涯を閉じた。彼は何一つ著作しなかった。プラトンの（おもに初期の）対話編のほか、クセノフォンのソクラテス関係著作が、彼の生涯と思想を知るための主要な手がかりである。

ソクラテスは、ソフィストたちの唱道する〈徳〉および世のいわゆる知者たちのもつ〈知〉を根本的に問い直した。そして、〈徳は知〉であり、〈魂への配慮〉としての知の追求こそが真に〈よく生きる＝幸福である〉ために何よりも心がけるべきことであると主張するとともに、〈知〉とは本来けっして誤ることのない絶対確実なものであるとすれば、真の知者は神のみであり、われわれ人間は善美の事柄を何一つ確実には知らない存在であると考えた。こうした自覚への機縁となったのは、〈ソクラテス以上の知者はいない〉というデルフォイの神託であった。彼はその意味を解明するために、世に知者と呼ばれている人たちを吟味して歩いた結果、彼らの方は〈何も知らないのに知っていると思ひ込んでいる〉のに対して、彼のみがみずからの無知を自覚している、すなわち〈無知の知〉という一点において相違していることに気づいた。そしてさらに、神託の真意はソクラテスに名を借りてすべての人間の無知を悟らせることにあると考えるに至った。〈徳とは何か〉〈正義とは何か〉といった問いを中心に、人々が知っていると思ひ込んでいる事柄を吟味論駁し、無知を悟らせる活動は、彼が〈神命〉としてみずからに課したものであった。この問答の過程に示された知の基準の厳格さ、論理と方法への明確な意識、〈何であるか〉という問いに込められた本質への指向などは、彼の生死のありかたそのものとともに、哲学に大きな転換と飛躍をもたらす原動力となった。 藤沢 令夫

(C) 1998-2000 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

ソクラテス問題とは何か

自ら著書を残さなかったソクラテスの生涯や思想を、プラトンたちの著作からどのように復元できるのか、あるいはソクラテスを主人公とするプラトンの対話篇の中で、プラトンとソクラテスの思想をどう区別するのかという問題をソクラテス問題という。哲学研究の現場の証言を聞いてみよう。

ソクラテスへの接近 納富信留『哲学者の誕生——ソクラテスをめぐる人々』（ちくま新書、2005）より

ソクラテス自身の著書とそれを書き著した資料との間には、「ソクラテス問題」と呼ばれる困難が横たわっている。プラトンやクセノポンらの書き物から窺われる「ソクラテス」は、それぞれ相異なった姿を示しており、それが実際のソクラテスの行状とどう重なり、どうずれているのか、が研究者を悩ませてきたのである。

「歴史的ソクラテス」の復元は、これまで、具体的には現存著作の四人の著者、アリストパネス、クセノポン、プラトン、アリストテレスの報告をどう評価するか、という問題として論じられてきた。

アリストパネスが前四二三年に上演した『雲』は、ソクラテスについての唯一の同時代資料である。しかし、喜劇としての歪曲ゆえに、この作品が「ソクラテス」復元のために用いられることはほとんどない。この取り扱いには、プラトンが描くソクラテス像からあまりにかけ離れているとの印象が働いている。「哲学者」ソクラテスが採用され、「ソフィスト」ソクラテスが一方的に退けられてきたのである。プラトン『弁明』（19C）での『雲』への否定的な言及も、大きく影響したことであろう。

弟子クセノポンは、とりわけ『ソクラテスの思い出』という貴重な言行録を残したが、そこに表われる「教育者ソクラテス」は、プラトンによる哲学的で強烈なソクラテス像とは対照的である。クセノポンは、十九世紀にはソクラテスについての証言者として尊重されていたが、二十世紀に入ると途端に厳しい評価に曝され、哲学史においてほとんど顧みられない状況が続く。彼の著作への再評価は、ようやくここ数年、一部の研究者の間で顕著になりつつある。

他方で、プラトンの描くソクラテス像にも、著者の天才ゆえに史料的价值への疑念が向けられてきた。たとえば、『パイドン』『国家』『パイドロス』等の対話篇でプラトン自身の「イデア論」をソクラテスの口から語らせているように、あまりに強烈で個性的な哲学が「ソクラテス」復元にはむしろ不都合と考えられたのである。この点では、平凡でも実直に言行を記録したクセノポンの方が、プラトンよりも信頼できるというわけである。しかし、クセノポンがソクラテスの語ったとおりを記録しているという想定も、素朴に過ぎた。たとえば、『饗宴』が叙述する、クセノポン自身がその公話の場に居今させたという証言は、対話の年代設定からはありそうにないことであった。

第四の証人であるアリストテレスは、ソクラテスに直接の面識がない分、称讃や非難といった感情に左右されていない、と信じられている。「倫理的な事柄への定義」や「帰納法」の案出を彼に帰する記述は、より客観的な哲学評価であると考えられてきた。しかし、アリストテレスの証言はあまりに限定され、ソクラテス像への貢献は多くはない。

この四人の証言の中からもっとも信頼できる像を取り出して「歴史的ソクラテス」を復元するというプログラムは、そういった作業自体への強い懐疑を伴いながらも、結局はクセノポンとプラトンのどちらを優先させるか、端的には、プラトンをどう扱ってそこからソクラテス哲学を取り出すか、という研究課題となってきた。多くの研究者は、プラトン対話篇の中に、実際のソクラテスに由来する「歴史的ソクラテス」と、プラトンの独創による「プラトンのソクラテス」の側面と区別する境界線を引こうとしてきたのである。

この後、筆者はソクラテス問題に対する新しいアプローチを示す。文学部哲学科に興味があり、哲学研究とはどのようなものかを知るためには、この著作を読むことをお勧めする。また、ソクラテスの哲学そのものにも興味がある人は、プラトンの対話篇『ソクラテスの弁明』『クリトン』『パイドン』『饗宴』を読むことをお勧めする。